

FILE 04 モブアルバム ～ケータイ写真を活用した実験系研究室ナレッジ・マネジメント～

「モブアルバム」は、カメラ付き携帯電話で撮影した写真にコメントをつけて送信すると、即座にウェブ上にアップロードされるシステム。他の人が撮った写真に、コメントを付け足すこともできます。

これを実験系研究室のコミュニケーション支援システムモデルとして導入・運用することにより、ナレッジ・マネジメントの新たな知見を得ようといわれてきた研究プロジェクトに、学生グループが参加しました。



**MEMBERS**  
左端が張娟(ちょう・けん)さん、右端が金江月(きん・こうげつ)さん。2人とも中国・大連からの留学生で、知識科学研究科・本多卓也研究室所属。この10月から博士前期課程2年生になりました。中央は本プロジェクトのアドバイザー、吉永崇史・富山大学特命准教授(2007年9月に本学知識科学研究科後期課程を修了)。

■「モブアルバム」で研究室内のコミュニケーションを支援  
本プロジェクトの舞台は、マテリアルサイエンス研究科の水谷五郎研究室。表面物理学の実験系研究室で、約20名のメンバー、6つ

2008/09/10 04:38:55  
撮影者:小野さん(M2)  
「こんなに出てます!」  
「小野君。何か間違いがないか必ず確認してください。試料が損傷を受けていないか…」出張先の水谷先生から、具体的なアドバイス。

2008/09/23 16:04:20  
撮影者:渡邊さん(D3)  
学会へ行った先で、ちょっと観光。左は水谷研でエジプト出身のアハマドさん(D2)。

2008/12/06 11:33:31  
撮影者:水谷先生  
学会のポスターセッションで懇話に説明する中山さん(M2)。

※この記事の写真は、すべてモブアルバムによって撮影されています。

の実験班を有しています。  
当時、知識科学研究科・博士後期課程の学生だった吉永崇史さんの提案により、水谷研に「モブアルバム」が導入されたのは、2007年5月のこと。これを活用することによって、「教員の存在が現場に偏在する雰囲気強化」と、「実験班を超えた協働が行われる体制づくり」を図り、「研究室メンバーがともに学びあい、成長していくために必要な知識創造の場」をつくることのできないかというのが研究の趣旨でした。  
※2008年3月時点で、17名(教授1名、助教1名、ポスドク2名、後期学生4名、前期学生8名、秘書1名)。

■研究テーマはキャリア目標に沿って  
卒業後も本学でポスドクとしてこの研究を続けていた吉永さんでしたが、2008年春に特命准教授として富山大学へ移ることに。そこでこのプロジェクト参加への名乗りを上げたのが、当時前期課程に入学して半年たったばかりの中国人留学生、金江月さんと張娟さんでした。  
引き継ぎにあたって、吉永先生は2人とじっくり面談し、今後のキャリアも視野に入れた2つの研究テーマを設定。将来、博士後期課程への進学を希望している金さんは「モブアルバムを活用しコミュニケーションをより良くするためのガイドラインづくり」、就職を希望している張さんは「既存のモブアルバムを超える ICT システムのコンセプトづくり」を選択しました。2人でのグループ活動を基本としつつ、それぞれが副テーマとしてのレポート作成に取り組むことになりました。

■現場でのフィールドワークを重ねる

まずはナマの現場を見ることから始めた2人。実際に研究室へお邪魔して水谷研の普段の様子を観察し、実験やゼミ活動のなかでどのようなコミュニケーションが行われているか、どのようにモブアルバムが使われているかなどを見ていきます。「普段の」様子を見るためには、観察者の存在を観察対象に意識させないことが大切。実験系研究室とはこれまで全く無縁という2人でしたが、水谷研究室のあたたかい雰囲気や2人の人柄のおかげであつという間に溶け込み、十分な観察を重ねることができました。

フィールドワークと並行して、吉永先生、本多先生を交えたグループディスカッションを7回実施。テレビ会議システムも活用しました。そして7月、2回にわたって水谷先生および学生メンバーへのインタビュー。モブアルバムの詳細な利用状況や研究活動への貢献事例、利用しての感想やニーズなどについて聞き取りを行いました。

こうした活動を積み重ね、2人は無事目標の8月にレポートを完成。たいへん意欲的な内容で、プロジェクトを任せられた吉永先生からも高い評価を得ることができました!

■4月3日  
初めの実験観察。2人とも中国では日本語・日本文化を専門として学んでいたため、見るもの聞くこと、すべて珍しい!実験装置を覗き込む張さんに、水谷先生が説明してくださいました

■7月15日  
水谷先生へのインタビュー。「どのようなことを伝えたくてこの写真を撮ったのですか?」「追加してほしい機能は?」

**POINT** 多層的なグループワークの場づくり  
吉永 崇史 Takashi YOSHINAGA  
富山大学 学生支援センター・トータルコミュニケーション支援室 特命准教授

この学生グループ・プロジェクトは、レポート執筆などの個人ワークから、フィールドワークによる水谷研究室メンバーとの交流という大きな集団での活動まで、グループワークの場が多層的に繰り広げられたという点でとてもユニークだったと思います。本多先生や私とディスカッションを行ったり、水谷研のメンバーと単なる研究対象以上の関係を築いたりなど、それぞれでも意味のある体験ですが、これらの活動が重ね合わさったことが、彼らの自主性を無理なく引き出すことにつながったのではないのでしょうか。その実現には何よりも、水谷先生をはじめとする水谷研究室メンバーの協力と、主テーマ指導教員の本多先生の理解が欠かせないものであったと思います。

集団	フィールドワークによる水谷研メンバーとの交流【実験・ゼミ観察8回、イベント参加4回】
個人	インタビュー【2回(水谷研メンバー5名)】
	アドバイザを交えてのグループ・ディスカッション【7回】
	2人でのピア・ディスカッション【多数】
	レポート作成

※対等な立場における対話や議論

■4月12日  
毎年恒例のお花見にも参加させていただきました。「家族みたい。にぎやかで楽しかった」と張さん

■8月6日  
一転、孤独なワーク。金さんがつけたコメント「深夜までモブアルバムのレポートを書いている張さん。二人は今一生懸命レポートをまとめています」

■6月12日  
3回目の実験観察にて、金さんがモブアルバムで撮影。金さんがつけたコメント「何の実験かは分からないですが、実験の姿を観察するのは本当におもしろいですね」

Interview 水谷研メンバーに聞きました

—金さん、張さんが初めて水谷研に来たときはどう感じましたか?  
小野さん 特に何も感じませんでした。違和感がなかった。  
中山さん 私はそのころ就活であまり研究室にいなかったのですが、新入生だと思っていました。違うと気付いたのはずいぶん後です。  
水谷先生 2人ともすごくフレンドリーで良い性格だから、まず人間のほうを受け入れちゃったんだよね。  
小野さん そうですね。むしろ、最近来ないなって思うくらい。  
水谷先生 吉永先生がいい印象だったから、僕らも信用してあの2人を受け入れたということはあると思います。  
渡邊さん 私もそう思います。正直、2年前に吉永さんが初め

て来たときにはすごく違和感がありました。でも、吉永さんは毎回ミーティングに出たり、OB会にも来てくれたり。それから全く違和感はなくなりました。  
水谷先生 うちの大学には元々、サブテーマなどでいろいろな人が頻りに違う研究室を出入りするという環境があります。そういうことに慣れてたのもあるでしょうね。  
—同じ学生として、彼女たちの研究活動については、どう思いましたか?  
小野さん 「研究活動」という意識はなくて、本当に日常生活と一緒に過ごしていたという感じ。わざとそう見せていたとしたら、彼女たちはかなり策士ですね。